

## C-4. 「虫博士がやってきた！」 西戸山幼稚園(東京都新宿区) <5歳児 6月>

園内での遊びの発展から、ゲストティーチャーとして、プロナチュラリストの方に来ていただき、フィールドビンゴゲームに参加していただいた。その時の子どもたちとのやり取りは、私たち教師とのかかわりにはない、「虫博士」とのキラキラ体験であり、その後の遊びに大きな影響をもたらしている。自然に関心が高まっているちょうどそのときに、虫博士と出会えたことで、どの幼児も興味を持って話を聞くことができた。

### ◎虫博士がやってきた!

アゲハががえった翌日、ナチュラリストの佐々木洋先生が来園する。イチジクの葉にいる虫を容器に入れて見せ、「これはね、葉虫といって、葉っぱを食べるんだよ。カブトムシの仲間だよ」と話を始めると、園庭に散らばっていた幼児が徐々に集まり始める。ずつとくっついて次々に質問をする幼児。一つ一つの話に目を丸くして聞き入る幼児。モンシロチョウの幼虫がきれいに食べて筋だけになったキャベツを見ていると、ハチが幼虫を食べ始める。先生が「すごいところを見られたね。食べてるよ。ハチだって食べ物がないと生きていけないものね。アオムシをお団子にしているよ。ハチの子どもに餌を運んでいくんだね。」の説明に、逃げるどころか顔を近づけ声も出さずにみんなで見ている。青虫団子を足で持ちよると飛び立つハチを「おーっ」と声を出してみる幼児、「半分残ってるよ」と言う幼児に「一度に持っていけなかったんだね。今日ではないかもしれないけど必ずまた取りに戻ってくるよ。」の説明で、残ったアオムシ団子をのぞき込む幼児がいる。



保育室に集まり、質問コーナーでは「カマキリはどうして100個もたくさん卵を産むんですか」「どうしてカマキリの赤ちゃんはこうやって逆さまに出てくるんですか」「ダンゴムシはどうして丸まるんですか」などの質問が出る。降園の支度があるのに、みんなで先生の後を付いていってしまうほどであった。

### ◎ほくたちも虫博士

翌日、登園して靴を履き替える前に保育室の前のキャベツを見て「昨日のハチが残っていたアオムシの団子がなくなってるよ」「どこ? 本当だ」「取りに来たんじゃないの」と話している。身支度を済ますとカラー帽のつばを後ろに回して「佐々木先生と同じかぶり方だよ」と言いながら歩いている幼児もいる。別の場所では虫眼鏡、自由画帳、マーカーを持ち、「昨日あんなにいたハチが全然いない」「バナナ虫もない」「カタツムリはいた。ブロックにいた」と歩き回り、「研究所を作ろう」とアスレチックの中にベンチを持ち込み、楽しそうに話をしている。

降園時、保護者から「昨日は家でずーっと虫のことばかり話していたんですよ。」「会う人みんなに虫博士の話をしていました。」など、佐々木先生とのかかわりの話が多く聞かれた。

佐々木先生が来た後、Y児は園庭の木々や草花のところによくいて、虫を見つけることが多くなった。虫の図鑑を見ていることも多くなった。プランターのキャベツのところにいるアオムシを手に取り、「あっ、これはモンキチョウの幼虫だよ。ほら、背中に筋が入ってるでしょ。黄色い線が家の図鑑に載ってたよ。」と近くにいる友達に見せている。しばらくすると「アオムシマユコバチがまた来るよ。」とまたキャベツのプランターをみている。



### 考察

幼児の感動が大きければ、もっとやりたい、もっと知りたい、なぜだろうと興味、関心は広がり、深まっていく。それを一緒に楽しめる教師の感性、やろうとしている気持ちや行動を受け止め、保障してあげることが大切である。



### ポイント

子どもたちの「なぜだろう、もっと知りたい」という気持ちを更に広げ、深めていくために、専門家のサポートをうまく活用しています。子どもたちだけでなく、保育者も自然への関わり方や面白さを知り、関心を高めていくことにより、子どもたちの感動を広く受け止められるようになるのだと思います。